

「戦時下における児童文化」について（その六）

—「東日小学生新聞」の「紙上作品展覧会」における位相と展開（六）—

熊木 哲

前稿へ「戦時下における児童文化」について（その五）（「大妻女子大
学紀要・文系」第三十二号、二〇〇〇・三）では、「東日小学生新聞」
の「紙上作品展覧会」における位相と展開に関して、昭和十四年（一九
三九）の第一四半期（一月～三月）を検討してきた。

昭和十四年第一四半期における作品展覧会は、直前期である十三年第四
四半期と比較してみると、日曜日に掲載された「紙上作品展覧会」（以
下、「欄」）の設定は直前期である十三年第四四半期と同様の二回である
のに、掲載作品数では「詩」作品以外はすべて減少していた。原因は、
十三年第四四半期の検討対象が一三週であったのに対して、十四年の第
一四半期は、九週分しかなかったということである。検討対象の一三週
のうち、一月一日のマイクログ資料へ欠け及び「欄」の設定のみならず作
品の掲載さえもない週が三回もあったことが掲載作品数の減少をもたら
したと考えられよう。

こうした「欄」の設定のみならず作品の掲載さえもない編集意図につ
いては、平日における作品掲載が定着し、日曜日ごとに「欄」を設定す
る必要がなくなったことが原因であろうと推測しておいた。

作品内容からは、この第一四半期に掲載された「児童文化」の各作品
には、「戦時下」故の作品は多くはなかった。この背景には、「昭和十三
年秋以降対支処理方策」に沿った大陸での戦況があったのではないかと
考えておいた。

一方、この第一四半期には「るこつ迎へ」の「綴方」が掲載されてお
り、前年（昭和十三年）十月の「漢口広東攻略」作戦の結果、「るこつ
迎へ」が各地で行われたであろうことが推測された。児童は、出征の見
送り、帰還の出迎え、遺骨迎えにと、その都度、動員されたのであろ
うし、また、遺族として行進の列に加わらざるを得なかった児童も少な
くなかった筈である。

「詩」では、時局柄を反映した作品は少なく、大方が児童の日常的な
身辺風景が題材となっていた。日曜日掲載以外の作品には、時局を反映
した作品が少なからず見られたが、児童の身近な者の戦死や「るこつ迎
へ」を内容とする作品は見られなかった。

「短歌」でも「戦時下」を内容とするものの掲載は多くなかった。こ
の第一四半期では、前年第四四半期にみられた「靖国の宮」や「遺骨迎
ふる停車場」などの戦死に関する語句も見えなかった。

「俳句」には、「短歌」には見られた「出征」の光景はないものの、
「凱旋兵」「帰還兵」があり、戦場にいる肉親からの「軍事郵便」が届き、
戦場にいる兵士を思って自分の日常の戒めとしている作品が掲載された。
しかし、この場合も「短歌」の位相とほぼ重なり、「戦時下」を内容と
する作品の掲載は多くはなかった。

「書方」「図画」についても、同様の傾向であった。日曜と平日に掲
載された作品を合わせて検討してみても「戦時下」故の字句の「書方」

や絵柄の「図画」作品の掲載は多くはなかった。

すなわち、昭和十四年第一四半期での「戦時下における児童文化」は、「昭和十三年秋以降対支処理方策」を背景に、比較的「戦時下」の色彩が濃くない展開を見せていたといえよう。

以下、本稿では、昭和十四年の第二四半期（四月～六月）の検討を試みる。引用に際しては、旧字体を新字体に改めた。なお、在籍校名は原則として掲載によった。在学年次のうち「高一」「高二」は高等科一年二年を示す。また、投稿者氏名は省略し、男子・女子と性別を記すにとどめた。

一 昭和十四年第一四半期の展開

第二四半期、四、五、六月を併せて検討するが、第二四半期の検討対象である日曜日は四月一日から六月二十五日までの十三回。第一四半期も十三回で、その内、国会図書館蔵のマイクロフィルム資料にへ欠ンがあり掲載確認の不可能が一回、「欄」はもとより作品の掲載がない日曜号が三回あり、検討対象は九回の日曜分であったが、第二四半期では、作品の掲載がない日曜号が四月二日（第七八七号）、同九日（第七九三号）、同二十日（第八一一号）、五月七日（第八一七号）の四回あり、九回が検討の対象となる。

この九回の日曜号のうち、「欄」の設定されたのは、五月十四日（第八二三号）と六月十一日（第八四七号）の二回のみであり、これも第一四半期と同様である。欄見出しに関しては、第一四半期では、二月二十六日は「紙上作品展」、三月十二日が「紙上作品展覧会」であり、統一性がなかったが、この第二四半期では、レイアウトに違いはあるが、共に「紙上作品展覧会」で統一されている。

紙面構成は、第一四半期同様、二回の「欄」とも全面掲載となっている。一方、五月二十一日には「俳句」五句のみが、また、二十八日は「詩」一篇のみが掲載されたにすぎない。九回の日曜日の作品掲載には、

ジャンルも作品数にも確かな基準といったものはなかったといえようか。さて、検討に際しては、これら二回の「欄」だけでは作品数が余りにも少ないので、この第二四半期でも、「紙上作品展覧会」の見出しのない日曜日の作品も検討対象とし、適宜、日曜以外に掲載された作品も検討する。

まず、作品のジャンル別の掲載事情を確認してみたい。

「綴方」は、四月十六日（第七九九号）と同二十三日（第八〇五号）に各一篇、「欄」が設定された五月十四日（第八二三号）と六月十一日（第八四七号）に各二篇、六月十八日（第八五三号）と同二十五日（第八五九号）に各一篇が掲載された。一方、五月二十一日（第八一九号）と同二十八日（第八三五号）、六月四日（第八四一号）には掲載作品はなく、合計八作品。

なお、前年・昭和十三年第一四半期に二三篇、同第二四半期に一二篇、同第三四半期に二三篇、同第四四半期に一六篇であり、十四年第一四半期には一一篇の「綴方」が掲載されていた。しかし、この前年の第四四半期における「紙上作品展覧会」の見出しを持っていた二回は、全面掲載ではなく、下七段の使用であるにもかかわらず一六篇の掲載があり、十四年第一四半期の二回の「紙上作品展覧会」が全面掲載であっても一篇に留まっていたことは前稿で確認したところであるが、この十四年第二四半期においては、更に「綴方」の掲載作品数が少なくなっている。

「詩」は、四月十六日、同二十三日に各一篇、「欄」の設定された五月十四日に四篇、同二十八日に一篇、六月四日に三篇、「欄」の設定された六月十一日に四篇、同十八日と二十五日に各一篇。ただし、五月二十一日には掲載はなく、合計一六篇。

昭和十三年の「詩」作品の展開は、第一四半期二三篇、第二四半期二〇篇、第三四半期一〇篇、第四四半期一六篇であり、昭和十四年第一四半期は一七篇であった。今期第二四半期の一六篇は遜色がなく、従って、十四年第二四半期における「詩」作品の掲載数は少なくないといえよう。

「短歌」は、四月十六日と二十三日、五月二十一日と二十八日、六月

十八日と二十五日には掲載がなく、「欄」の設定された五月十四日に四首、六月四日に一首、「欄」の設定された六月十一日に二首が掲載され、合計で七首。

昭和十三年の「短歌」作品の掲載は、第一四半期には三五首、第二四半期では二三首、第三四半期では一六首、第四四半期では一二首であり、十四年第一四半期では一首であった。従って、十三年は次第に減少傾向が見られ、十四年第一四半期は減少数は直前期に対して最小の減少に留まったが、この第二四半期では更に掲載数が減少したということになる。

「俳句」は、四月十六日と二十三日、五月二十八日、六月二十五日には掲載がなく、「欄」の設定された五月十四日に二句、同二十一日に五句、六月四日に一句、「欄」の設定された六月十一日に一句、同十八日に三句が掲載され、合計一二句。

昭和十三年の「俳句」作品の掲載は、第一四半期では四三句、第二四半期では三六句、第三四半期では二二句、第四四半期では一六句であったが、昭和十四年第一四半期にはわずか三句と激減していた。従って、この第二四半期では二二句と前年第四四半期に近づいたといえようか。それにしても、前年前半期が七九句に対して十四年前半期は一五句であり、掲載数の落差は歴然としている。

「書方」は、四月十六日に四句、同二十三日に六句、「欄」の設定された五月十四日に四句、同二十一日と二十八日には掲載がなく、六月四日に七句、「欄」の設定された同十一日に七句、同十八日に七句、同二十五日に二句が掲載され、合計三七作品。

昭和十三年の「書方」作品の掲載は、第一四半期一四八作品、第二四半期一〇一作品、第三四半期四五作品、第四四半期に五八作品であり、昭和十四年第一四半期には三六作品であったから、この第二四半期での三七作品は、たとえ一作品とはいえ掲載数が増加している。といっても、十二年度には及ぶべくもないが。

「図画」は、それぞれ「欄」の設定された五月十四日に七句、六月十

一日に六句が掲載されただけで、他の日曜日には掲載されておらず、合計で一二作品。

昭和十三年の「図画」作品の掲載は、第一四半期八一作品、第二四半期六七作品、第三四半期二七作品、第四四半期一九作品。十四年第一四半期は一二作品であり、この第二四半期も同様の十三作品の掲載があった。掲載数は第一四半期と同数であるが、掲載機会が第一四半期が三回であったのに対し、第二四半期は「欄」の設定された二回の掲載となり、掲載機会は減少していた。

このように、昭和十四年第二四半期における作品展開を直前期である十四年第一四半期と数量的に比較した場合、「俳句」作品の大幅な増加を除いて（第一四半期のわずかに三句が少なすぎたというべきであろうが）、「書方」の微増（二作品増）に留まり、「綴方」「詩」「短歌」「図画」は第一四半期の掲載数を下回ったのである。

このことは、検討対象が第一四半期と同じ九回であっても、五月二十一日には「俳句」五句のみが、また、二十八日は「詩」一篇のみが掲載されたにすぎなかったことが原因と考えられようか。

十四年第一四半期において見られた「欄」の設定が激減したのみならず作品の掲載さえもない日曜日の編集意図については、前稿において、平日における作品掲載が定着し、日曜日ごとに「欄」を設定する必要がなくなつたからではないかと推測しておいた。この第二四半期にも同様の推測をしておきたい。

二 昭和十四年第二四半期における「綴方」

「綴方」の掲載作品は、合計八作品。内訳は、次の通り。

「おるす」(横浜市平沼校四年男子、四月十六日・第七九九号)

「とみ子」(神奈川県旭校四年女子、四月二十三日・第八〇五号)

「望遠鏡」(東京市常盤松校三年男子、五月十四日・第八二三号)

「ゆふべ」(神奈川県茅ヶ崎第二校五年女子、同右)

「小犬と弟」(東京市中延校六年女子、六月十一日・第八四七号)

「ユデタマゴ」(静岡県御殿場校二年男子、同右)

「越道に行つた事」

(山梨県三富校六年男子、六月十八日・第八五三号)

「製鋼所」(長野県福島校六年男子、六月二十五日・第八五九号)

作品題名には「戦時下」を思わせるものはない。

「おるす」は、いつもは家に居る母が外出したため一人の留守番は心細いというもの。時刻は夕方なのであるうか。「雨戸」がガタガタする度に驚かされた。お母さんが帰ってきた時、「涙がでさうなむねをこらへながら、お母さんの顔をじつと見つめて、ほつとした」。一人っ子の初めての留守番でもあったのだろうか。自分以外誰もいない家の経験がなかったであろう、初めは静かなうちに宿題を済ませてしまおうとしたが、誰もいない不安は次第次第に膨らんでいったようだ。

「とみ子」は、「私」に懐いている三歳の妹の「とみ子」が可愛くてならないというもの。「とみ子」は子供五人のうちの「末から二番目」。「とみ子」は、「下にまだ一人赤ちゃんが居るから、もうさうあまえません」という。乳児の世話に忙しい母親に代って、「とみ子」が甘えるのは「私」になのだらうと思わせられる作品。

「望遠鏡」は、自分の作り掛けを母が仕上げてくれた「望遠鏡」は遠くまで良く見えるというもの。

「ゆふべ」は、勉強の出来る妹にご褒美がでるといので、私もねだてみる話。

「よしよし、それでは東京のけえりに松屋でなんか買ってきてやんべえ」ととてもごきげんでした。私は「あたいの父ちゃんは、やつぱりい、父ちゃんだなあ。」とにこにこすると、「ひやかすなよ、うふふう。」つていくぶんお酒のする息をはきかけました。

妹は「オーバがい、」とリクエスト。作品に季節の明示はないが、「オーバ」から書かれたのは寒い時期と推測できよう。第一四半期の「綴方」には、北海道の厳しい冬の寒さにもかわらず、「非常時」だから「ユタンポ」を買うことを我慢するという「非常時」(一月八日、第七一五号)という「綴方」があった(前稿)。「非常時だから」と児童自身が自制する内容であったが、「ゆふべ」において「お父ちゃん、あたいにも何か買つて来てよ」と思ひきりつんとして父にねだって見せる「私」には年相応の可愛さがある。ほろ酔い気分の父親が照れている様子も鮮やかに描かれているが、この親子には「非常時」の認識が無いと責められるべきであろうか。

「小犬と弟」は、弟がねだって飼うことになった小犬といつも一緒に弟の様子を描いたもの。「五銭」で小犬を貸せといわれて憤慨する弟。自分の顔をなめさせて喜んでいる弟。小犬が入り込んで叱られないように鶏小屋の金網の破れを修繕する弟。小犬のために弟は一生懸命だ。そんな弟を姉は良く描いている。

「ユデタマゴ」は、ゆで卵を「ハンブンニ」して食べ、残りを食べようとしたところに姉が帰ってきたので、その半分を「カクシテシマッタ」が姉に見つかり食べられてしまった。「トダナへ シマツタ ハウガ、ヨカツタ」と悔やむのだった。若干、意味が分かりにくい作品だが、姉に食べられてしまった悔しさは伝わってくる。

「越道に行つた事」は、父が仕事をしている遠くの山の峠まで母と弟と草刈りに出掛けた話。大人たちは「桑の木を根から切つてゐる」し、「僕は兎の草」刈りをはじめた。

「製鋼所」は、叔父を訪ねて「製鋼所」へ行つた話。「職工があせを流して、赤い顔して働いてゐる。コークスを投げる音、かあなかあんと鉄を打つ音、トロツコが鉄のかたまりをくだいたのを、一ぱい重さうに運んで行く」。熱く、活気に溢れた仕事場の様子が効果的に描かれている。

以上のように、内容的にも「戦時下」故の作品はこれらの中には見当

たらない。「綴方」作品では、「戦時下」色の薄い四半期であったといえよう。

しかし、「越道に行つた事」の背景には「戦時下」を探ることが出来る。

この作品には、遠くの山の畠で「兎の草」を刈る「僕」が登場する。兎は生んだ子が売れ、毛皮が戦地にいる兵隊さんの防寒服になり、肉は食物になるから、兎を飼うことが「御国の為になる」という「綴方」作品「資源愛護」が、既に前年十三年二月二十日（第四四〇号）に掲載されていたことを確認した（「戦時下における児童文化」についてへその一）。

昭和十四年第一四半期の二月九日・木（第七四二号）には、「兎報国」の見出しで、次のような記事が兎小屋の前で兎を膝に乗せた女生徒の写真付きで掲載されていた。

今年は卯年なので、兎が方々で大もてですね。千葉県安房郡吉尾村小学校では、お国に捧げようと、生徒のお家に兎を各一羽づつ飼はせ、それが五百羽位あります。又学校でも二十数羽飼つて、上級生の女生徒達が、代る代る世話をしています。

この記事が掲載される前日の二月八日には、「兎毛皮使用制限規則」（農林省令第六三三号）が出された（山中巨『欲シガリマセン勝ツマデハ』辺境社、一九七九・一）。「兎」が法律上「戦略物資」として位置付けられたということになる。

本稿で検討している昭和十四年第二四半期では、五月三日・水（第八一三三号）に、「先生も生徒も一緒に 兎と緬羊を飼育 防寒材料を作る 開地校」の見出しで、次のような記事を写真付きで掲載している。

山梨県南都留郡開地校では、防寒用軍服の毛皮にするため、今年から学校で先生も生徒も一緒になって、兎を飼ふことになりました。

（中略）同校では兎のほかに山羊を飼っていますが、近く毛織物のもともなる緬羊も飼ふ計画をたててみます。

また、六月二十九日・木（八六二二号）では、「長陽第四校でも 兎報国」の見出しで、山形県鶴岡市の長陽第四校では、「一昨年の冬から」学校と生徒の家で兎を飼うことを奨励し、「兎は理科の実験にしたり、皇軍将兵の防寒用として、軍部に納めてみます」との記事を掲載している。「開地校」と「長陽第四校」とでは、飼育開始時期が異なるが、「資源愛護」の新潟県見附校や千葉県吉尾村校とも共通する「戦時下」における目的を共有するものであり、多くの尋常小学校で実践されたことであろうことが推察される。

「越道に行つた事」に見える「兎の草」刈りが、「兎報国」の実践であったとは必ずしもいえないことはいうまでもない。しかし、「兎報国」ではなかったともいえないのではないだろうか。「開地校」が南都留郡であり、「三富校」が東山梨郡であることを考慮すれば、「三富校」でも「兎報国」が奨励されていたと考えられるのではなからうか。「戦時下」という時局柄で何にでも綱を被せるつもりは毛頭ないのであるが。

結論的には、前述したように、日曜日に掲載された「綴方」作品には「戦時下」色が薄かったといつてよからう。

では、日曜日以外の「綴方」作品をしてみる。

第二四半期、四月一日・土（第七八六号）から六月三十日・金（第八六三三号）までの日曜日掲載分を除いた、平日の掲載数は五五作品である。この期間の発行数は、七七号。平日の五五作品と日曜掲載分八作品で合計六三作品となり、計算上は一号あたり〇・八となり、六号に五作品程度が掲載されたことになる。発行形態は一週間のうち月曜日が休刊であったから、「綴方」の掲載されないのは一週間のうち一日程度ということにならうか。

本稿「一」の結末で、「欄」の設定が激減したのみならず作品の掲載さえもない日曜日の編集意図について、平日における作品掲載が定着し、

日曜日ごとに「欄」を設定する必要がなくなったからではないかと推測しておいた。「綴方」においては、以上のように、計算上はこの推測が当てはまることになろうか。

平日に掲載された五五作品のうち、「戦時下」を内容とすると考えられるものは一四作品。約四作品に一本の割合であり、決して少なくないといえよう。

この一四作品には、「戦時下」色に濃淡があるといえる。

自分たちの舞台を「白衣の兵隊さんが見ていらつしやるのだと思ふとうれしくなる」という「出演の前後」（東京市中延校五年女子、四月一日・土、第七八六号）。舞台での出番にドキドキし、脈拍が「出演の前後」で違ったというもの。

可愛がっていた馬が徴発されてから「馬のゆめばかりみてみると、おばあさんはいひました」という作品は「馬の徴発」（栃木県蘆野校五年男子、四月二十一日・金、第八〇三号）。

馬の徴発を内容とする作品には他に、「徴発された馬」（五月三日・水、第八一三号）がある。

徴発された馬は、僕等もよく草をたべさせにいつたりした。やがて晩方になると家では、はたもちをたべさせたり、水をのばせたりして、みんなで、其の馬をなぐさめた。なみだがぼろぼろと出て来た。

家にとって重要な労働力であり、家族の一員であり、懐いてもいる馬を戦場に送りだすのは何とも悲しいものであった。

この作品は、「馬の徴発」と同じ在籍校の同級生、栃木県蘆野校五年男子の作品であり、引用部の前には、「馬の徴発だよ、と言ふ声が耳にはいつた。僕がたまげたとびおきて見ると、赤い紙や青い紙がいつぱいあつた。僕はすゐぶん来たなといつた」という一節がある。二つの作品は同じ校区での「徴発」を内容とするものであったが、この年第二四半

期には、四月七日「軍馬資源保護法」が公布され、家畜としての馬から「戦時下」における軍用馬へと統制化されていった。

「日中戦争、太平洋戦争を通じて徴発された軍馬は、『およそ五十余万頭と推定される』。これら戦線に送られた馬たちは、日本には戻ってこなかった」（講談社『昭和一二万日の記録』第五卷、平成元年一月、以下『昭和5』と略記）。送りだす家族は、自分たちの家族である馬が二度と戻ってくることはないことを知っていたのであろう。

この他に「戦時下」を背景とする作品には、兵隊さんに肩車されてはしゃいでいる可愛い妹を描いた「あやこちゃん」（神奈川県旭校四年女子、四月二十五日・火、第八〇六号）、生れたばかりの弟を立派な兵隊さんにして「支那を降参」させるといふ「お母さんのかはり」（秋田県小坂元山校五年女子、四月二十六日・水、第八〇七号）、父と靖国神社へ参拝し「しなのぶんどり品をみました」といふ「やすくにしんじや」（本所区江東校三年男子、五月十三日・土、第八二三号）、「ありがたい日の丸弁当」を持っていた「遠足」（横須賀市鶴久保校四年女子、五月十九日・金、第八二七号）、「めいよの戦死」をする「兵隊ごっこ」（茨城県若松西校五年男子、五月二十七日・土、第八三四号）。「とつかん」をするのは「兵たいごっこ」（神奈川県鎌倉第一校三年男子、六月二十日・火、第八五四号）。

また、作品が載った「東日小学生新聞」を「満州の兄さんに送つてやろう」といふ「うれしかつた事」（北海道鷹栖校高一男子、六月一日・木、第八三八号）、自分の絵の具で「日の丸」を作った妹を叱ってしまった「妹」（北海道音威子俯校六年男子、六月十日・土、第八四六号）、雨の日の神社参拜で「武運長久」を祈る「おみやまゐり」（横浜市太田校三年男子、六月十六日・金、第八五一号）などがある。

これらは、何れも、比較的「戦時下」であっても深刻さの濃くないものといえる作品であったが、次の「英霊」と「兄さんの出征」は、これらと事情は異なる。

「英霊」（横浜市大岡校五年男子、五月十七日・水、第八二五号）は

次のような作品である。

いつの日曜だったか、伊勢ぶらをしてゐたら松屋の方からかなしい音楽が聞えて来た。いつのまにかお巡りさんが「南支からゐこつが帰りましたから、号令と共に礼をして下さい。今まではちの巢をついたやうにさわがしかつた大通も、真夜中のしつけさとなつた。号令がかゝつた。

「礼」。皆は自ら頭がさがつた。かなしい音楽と共に小さい女の子が、首から白い紐をさげて小さい箱をぶらさげていく。

「なほれ」。二の号令がかゝつた。もう通り過ぎてオデランの横を通つていつた。大人の人たちが、「あ、もつていぬい事をしたものだ。今酒のんでしまつた。」といつて半泣きをして涙をぼろ出してゐた。僕は、「なんてなまけないんだろ、活動へはいらうなんて。」一人つぶやいた。

第一四半期には、児童が教師に引率されて「百十一のゐこつ」迎えに動員された作品「ゐこつ迎え」（三月二十二日）が見られたが、この「英霊」は、たまたま日曜日に映画でも見ようかと出掛けた伊勢佐木町で、戦死者の遺骨迎えの行列に出会い、歓楽街で遊興していた大人も子供も「英霊」を迎えて反省したという内容であり、「ゐこつ迎え」がいれば設定されたセレモニーであるのに対し、歓楽街での「英霊」迎えが享樂的な「銃後」と生死をかけた戦場とがひと繋がりであることを端的に示している。そのことを理解しているが故に「反省」するのであり、「反省」することが求められていたといえよう。

ここでは「小さい女の子」が「戦時下」そのものの状況下にあることはいふまでもないが、作者の少年も「銃後」にあつて「戦時下」故の心境を持たされたことになる。「小さい女の子」も作者の少年も、共に「戦時下」における被害者なのである。

「英霊」迎えが「戦時下」であることは勿論だが、より直接的に「戦

時下」に置かれているのが、「兄さんの出征」（横浜市下野谷校五年男子、六月十四日・水、第八四九号）。

いよ／＼今日は兄さんの晴れの出征の日だ。表に数多く送られた出征旗が、風にをどつてゐる。兄さんは赤いたすきをかたにかけて、近所へあいさつにいつてゐない。

親類の人が大勢来た。えんがははに出てお父さんから、赤い召集令状を見せてもらふ。じつと見ていく中「僕も今に……。」と心が言つてゐる。いよ／＼兄さんが出征される七時となつた。お赤飯も食べた。兄さんはもう此の家にゐないのだ。今まで兄さんと遊んで来た事も、永久に消えてしまふのではなからうか？いよ／＼そんな事があるものかと、自分で自分をなぐさめながら、表に出て軍旗をにぎつた。

町会の人が万歳を三唱した。皆もそれに続いて三唱した。兄さんは笑顔でそれに答へた。いよ／＼出発だ。プラスチックバンドが来た。火花が打ち上げられる。兄さんは黙々と楽隊の後に続く。石川君や坂本君が僕と並んで続く。もう潮見橋を渡つてゐる。

出来るなら早くいきたい。もつとゆつくりいつてくれ。だが、先頭は行く。省線鶴見駅へもう来た。おごそかな「君が代」もすんだ。市長代理の祝ふ言葉もすんだ。兄さんの元気なあいさつも終つた。

電車は動き出した。僕は心の中で、兄さんしつかりやつて来てく

ださいといつた。

この時期の応召風景を知ることが出来る作品で、楽隊が出て、火花があがる誠に賑やかな出征式である。出征を内容とするだけに、暗さや不安は表面には出てこない。むしろ、「僕も今に……。」という覚悟が主題になりがちであるが、本音は、兄の先行きが不安である。「兄さんと遊んで来た事も、永久に消えてしまふのではなからうか」との思いは打ち消してはみるものの、打ち消す答えは「自分で自分をなぐさめ」ることとし

かない。「出来なら早くいきたくない。もつとゆつくりいつてくれ」とは、少年の本音であろう。

三 昭和十四年第二四半期における「詩」「短歌」「俳句」

第二四半期の日曜日に掲載された「詩」作品の数は、合計一六作品。内訳は、次の通り。

「よるの空」(茨城県日立第四校三年女子、四月十六日、第七九九号)
「エンソク」(渋谷区長谷戸校二年女子、四月二十三日、第八〇五号)
「ぬこつむかへ」

(茨城県日立第四校三年男子、五月十四日、第八一三号)

「もみぢ」(茨城県若松東校四年男子、同右)

「一年生」(東京市中延校六年女子、同右)

「けんくわの後」(船橋市八栄校六年女子、同右)

「垣止め」(福島県洪川校高一男子、五月二十八日、第八三五号)

「野球」(茨城県日立第四校四年男子、六月四日、第八四一号)

「朝のお使ひ」(王子区岩淵校高二女子、同右)

「石に座つて」(船橋市八栄校六年女子、同右)

「池におちたいくちやん」

(茨城県日立第四校三年男子、六月十一日、第八四七号)

「ばらの花」(東京市本所江東校五年女子、同右)

「牛」(神奈川県茅ヶ崎第二校五年男子、同右)

「ふじ」(東京市落合第三校六年男子、同右)

「馬」(茨城県日立第四校三年女子、六月十八日、第八五三号)

「妹」(岩手県小山田校六年女子、六月二十五日、第八五九号)

二つずつある「茨城県日立第四校三年女子」と「同三年男子」はそれぞれ別人。

このうち、時局柄を反映したものとしては、題名から推測が出来るように「ぬこつむかへ」のみであり、それ以外は児童の日常的な身辺風景が題材となっている。

夜空を見上げて、星は沢山あるけれど、「お月様はたゞ一人。さびしさうにうかんている。おほしさまはにこくくしてゐる」という「よるの空」。題名通りの「エンソク」では、「ピノマルペンタウ」が「ズラリトナランダ」。もみぢの葉を数えていて友に「かたをた、かれてびつくりした」のは、「もみぢ」。「校門をくぐると一年生 にこく元気で歩いてる」にはじまる「一年生」。「ピカく光るランドセル、ピカく見える赤いくつ、頭をふつて歩いてる」と展開する作品は、六年生のお姉さんからみた入学風景か。母親と手をつないだ新入生が、頭をふりく校庭を歩く様子がよく描かれている。

細長い田の中で、

徳田様の牛が、

をぢさんに、

横腹をびしりとた、かれながら、

よちくうなつて居る。

土がばかげてかたくつて、

憎らしいよ。

きのふ

おとうさんたちと、さんぽに行つた。

とちゆうまで行つたら、馬が来た。

材木をたくさんつんでゐる。

私は「おもいだらうに」と思つた。

馬はおもいとも

言はずに行つた。

馬はばかくと、足をならしながら行つた。

前の作品は「牛」、後の作品は「馬」。共に、生活風景の一齣で、働く牛や馬への思い遣りの心が作らせた作品であろう。こうした日常生活の中に「戦時下」は割り込んでくる。

ぼくがうちにみるとさびしさうな

おんがくがきこえてきた。

みちへでると、

まもなくのこつがきた。

せんせいが「きれい」といった。

ぼくもみんなといつしよに

れいをした。

あたまをあげてみると、

前にはぬこつがきてゐた。

あとから人が、さびしさうにあるいていった。

うしろのはうの人ほど、

あるきかたがはやかつた。

「ぬこつむかへ」という作品である。「綴方」作品「兄さんの出征」では、楽隊が鳴り火花があがったが、「ぬこつむかへ」では、「さびしさうなおんがく」が鳴るばかりである。参列している人々は「さびしさうに」行列して行ったが、「うしろのはうの人ほど、あるきかたがはやかつた」。児童の眼は確かである。悲しむ心の程度の相違が行進の速度となつて表れたことをしっかりと描いている。

日曜日に掲載された「詩」は一六作品であり、第一四半期での掲載数（一七作品）に近く、内容的にも「戦時下」色の濃い作品が第一、第二四半期ではそれぞれ一作品ずつと、ほぼ同様の展開を見せたといえよう。では、日曜日以外の掲載作品はどのようになっていたのであるうか。

第二四半期、四月一日・土（第七八六号）から六月三十日・金（第八六三三号）までの日曜日掲載分を除いた、平日の掲載数は七四作品ある。

この期間の発行数は、七七号。平日の七四作品と日曜掲載分一六作品で合計九〇作品となり、計算上は一号あたり約一・一七となり、毎号一作品以上が掲載されたことになる。

平日掲載の七四作品のうち、「戦時下」が作品の背景となつていてと考えられるのは、次の三作品。

「兵隊さん」（秋田県栄校五年男子、四月十九日・水、第八〇二号）

「帽子」（船橋市八栄校六年男子、六月二十日・火、第八五四号）

「飛行滑走」（東京市中延校六年女子、六月二十八日・第八六一号）

勲章さげて、剣さげて、

おひげをはやした兵隊さん、

笑つて僕にききました。

停留所はどこですか。

右へまがつてさかおひりて、

左へまがる所です。

やさしくをしへてあげました。

お札をのべて足早く僕とわかれてゆきました。

兵隊さんになりたいなあ。

「兵隊さん」という作品であるが、ここに描かれる情景は、「戦時下」といっても深刻なわけではない。軍人がいても「戦時下」でなかった時代は無難である。将校に道を聞かれたからといって「戦時下」とは限らない。その意味では、男の子が将校に憧れる一般的な内容ともいえようであるが、掲載された時代、ご時勢ゆえに「戦時下」を読み取ることが可能な作品であるといえよう。

「飛行滑走」も同様な作品。三機編隊が離陸する様子を内容とするが、戦地へ向けての発進でもなく、いわば飛行ショーであり、飛行機の離陸に挙がる歓声を内容とするから「戦時下」なのではない。やはり、掲載

された時代故に「戦時下」の風景と読める作品なのである。

「帽子」は、次のような作品。

僕の帽子皮が無い

上も少し切れてゐる

ひさしの上の皮もない、

戦地に行った兄さんに、

買って貰った此の帽子、

兄さん思つて

大事にかぶつてる。

「兵隊さん」「飛行滑走」と比較するまでもなく、「戦地」と直に繋がっている。いつ買って貰ったのかは分からないが、帽子は壊れはじめている。壊れた時間だけ兄の戦地での時間が経過したように思えるのだが。第一四半期では、日曜日掲載の作品ではなく、それ以外の曜日において時局を反映した作品が少なからず見られたことを前稿で確認した。

第二四半期における「詩」では、日曜日と平日掲載分を併せて九〇作品のうち、「みつむかへ」と「帽子」にはつきりとした「戦時下」が認められ、背景として「戦時下」を読み取れる作品はあるが、投稿した児童の身内に係わる深刻な「戦時下」を思わせる作品はなかったといえよう。

「短歌」を検討する。

日曜日掲載の「短歌」は、合計七首。内訳を以下に挙げる。

妹は戦地におくる手紙をばねむきも忘れ一人書きあゐる

(横浜市磯子校高二女子、五月十四日、第八二三号)

傷兵に席をゆづつて何となく心晴れたる汽車の中かな

(川崎市田島校六年男子、同右)

豆腐屋の鈴の音淋しく聞え来る我が病床の春の夕ぐれ

(千葉県万歳校高一男子、同右)

石垣の間より萌えし小草にも生きる力の充ちてあり

(横浜市西戸部校高一男子、同右)

ランドセル中の筆入れからくとうるさい音の学校の道

(横須賀市鶴久保校四年女子、六月四日、第八四二号)

遠くより汽車の走るひびきして停車場の兄思う夕

(札幌市第二校高二男子、六月十一日、第八四七号)

入営ののぼりが高く青空にはためきををれり戦勝の日に

(山形県雉音寺校高一男子、同右)

日曜日掲載の「短歌」は、第一四半期には十一首であったが、この第二四半期は僅かに七首であった。しかし、僅か七首のうち、「戦時下」を内容とする作品は四首であり、掲載数の半ばを超えていることになる。「妹」は、戦地への慰問袋にいれる手紙を書いているのであるうし、「傷兵」は、文字通り傷ついた兵士のことであろう。「入営の」は、出征兵士を出した留守家庭である。「遠くより」の作品も、「停車場の兄」とは、出征の見送りの光景を思い出しているとも考えられる。なお、この作品は五月三十日・水(第八三六号)の再掲載作品。

では、日曜日以外の平日掲載作品について検討する。

第二四半期、四月一日・土(第七八六号)から六月三十日・金(第八六三号)までの日曜日掲載分を除いた、平日の掲載数は三三作品。前述したように、この期間の発行数は、七七号。平日の三三作品と日曜日掲載七作品で合計四〇作品(再掲載一作品を含む)となり、計算上は一号あたり約〇・五二首となる。日曜日掲載のジャンル別作品展開の検討でも、「短歌」の掲載は十三年第二四半期から減少傾向にあることが確かめられたが、この第二四半期での掲載総数も前年に比べると少ない。第一四半期での日曜・平日を合わせた掲載総数は三九作品であり、第二四半期も同様であった。特に四月は僅かに三首にすぎず、日曜日の掲載はなかった。

平日掲載の二三作品のうち、「戦時下」が作品の背景となっていると考えられる「短歌」は、次の八作品。便宜上、掲載順ではなく、作品内容の類縁性に沿ってまとめてみる。

けふもまた歓呼の聲に送られて出て行く勇士の姿をがめり

(神奈川県茅ヶ崎第三校高二男子、五月十一日・木、第八二〇号)

丈夫の肩にかけたる赤襷名の黒々と雄々しかりけり

(神奈川県茅ヶ崎第二校高二男子、六月九日・金、第八四五号)

われの手紙の一字よ海越えて戦地に存す兄を護れと

(神奈川県茅ヶ崎第三校高二男子、五月三十日・火、第八三六号)

父上手紙もらつた弟が返事書いてと我にせがめり

(茨城県若松東校六年男子、六月二十日・火、第八五四号)

汽笛をば聞くごに思ひ出す日の丸ふりて別れし兄を

(神奈川県茅ヶ崎第三校高二男子、六月二十九日・木、第八二六号)

君のため花と散りたるますらをを無言で迎ふ今日の悲しさ

(東京市長谷戸校六年男子、六月六日・火、第八四二号)

大陸で花と散つたわが兄よ遺骨となりて今日凱旋す

(東京市浅間台校六年男子、六月十五日・木、第八五〇号)

慰むる身をは忘れてますらをの手柄話に耳そばだてつ

(神奈川県茅ヶ崎第三校高二男子、六月二十一日・水、第八五五号)

第一首「けふもまた」と第二首「丈夫の」は、出征の様子を詠んだもの。

「戦時下」の風景としてお馴染みとなつてしまった。

第四首「父上に」は、父が「内地」から弟に手紙を出した可能性や「外地」での滞在の可能性も否定できないが、ここでは、「戦地」からの手紙と考えてみた。従つて、第三首「われの書く」、第四首「父上に」、第五首「汽笛をば」の三首は、出征後の父や兄が詠まれた作品群といえる。

第三首「われの書く力の一字よ海越えて戦地に存す兄を護れと」の「力の一字」は、「千人力」のこと。「千人力」と題した「詩」が昭和十三年一月九日・日の「紙上作品展」(第四〇四号)にあったことは前述した(その二)。

第六首「君のため」は「遺骨迎え」を詠んだもの。「君」は天皇のことであろうが、「君のため」に「花と散りたるますらを」の表現が「短歌」に見えるのはこれが初めか。

第七首「大陸で」は、言うまでもなく、兄の戦死を詠んだもの。肉親の戦死を内容とする作品が「欄」に見えるのは、昭和十三年第二四半期、四月二十二日(第四九四号)に「戦死した父に手向けん枝桜」が最初であった(その三)。また、兄の戦死が作品に現われたのは十三年の第四四半期、十一月二日(第六五八号)の「綴方」、「兄さんの肖像画」であり、「短歌」にも「征さし兄身は戦場の露となりしも」が掲載されていた(その四)。

第八首「慰むる身をは忘れてますらをの手柄話に耳そばだてつ」は、傷兵の「手柄話」を聞いている様子であろうか。

以上、平日掲載の「短歌」には、出征——戦場——帰還(遺骨或は傷兵)という兵士にとって一連のステージが現われたことになる。

なお、「神奈川県茅ヶ崎第三校高二男子」による四作品の作者は何れも別人。学年による教育活動の一環としての投稿でもあったのであるうか。何れにしても、「第三校」という一つの校区内で、出征兵士の見送りがあり、兄が戦地におり、帰還した傷兵がいたということになる。こうした現象が「茅ヶ崎第三校」のものだけではなかったであろうとの

推測は可能であろう。

「俳句」を検討する。

日曜日掲載の「俳句」は、合計十二首。内訳は次の通り。

福寿草枝ひろげたり松のやう

(函館市若松校五年男子、五月十四日、第八二三号)

いちじくの芽ももえいでぬ春の日に

(沼津市第四校男子、同右)

人影のぼんやり見ゆる春の闇

(東京市水元校五年男子、五月二十一日、第八一九号)

梅の木に雀二三羽物語り

(岩手県上平沢校六年男子、同右)

ストーブに我も我もと集る手

(栃木県蘆野校五年男子、同右)

春風にすみ通りてひばり鳴き

(北海道幌内校高二男子、同右)

雨が止む雲が切れ飛ぶあの山へ

(新潟県今町神明校四年男子、同右)

たそがれや屋根より飛んだ雨蛙

(宮城県米谷校高二男子、六月四日、第八四一号)

笹舟と仲よく遊ぶ金魚かな

(小樽市稲穂女子校五年、六月十一日、第八四七号)

ニュース見てふと思ひ出す兄のこと

(横浜市北方校六年男子、六月十八日、第八五三三号)

今日の雨、兄の征ししを思ひ出し

(宮城県新田校高二男子、同右)

煙見え春風吹きて汽車の音

(秋田県五城目校高二男子、同右)

第十句「ニュース見て」と第十一句「今日の雨」の二句のみが「戦時下」を内容とするもので、他は児童の身辺詠とでもいふべき作品。春を内容とする作品が目につくのは季節柄というものであろう。

「ニュース見て」は、ニュース映画の中に出征した兄に似た姿でも見つけたのであろうか。「昭和5」(前出)によれば、「日中戦争勃発を契機にニュース映画ブーム」となったという。ニュース映画を上映する専門館が増加し、「国内の戦勝気分もあってブームを早していた」。ヒットラーが大衆操作の為に映画を利用したことへの援用であろうが、昭和十六年になると「全国の映画館で、国策浸透、戦意高揚のため、ニュース映画の強制上映が実施」(同前)されることになる。

第十一句は、兄の出征した日が「今日の雨」のような天気だったのだろうか。「煙見え」と並べられての掲載は、「春風吹きて」の明るさ故に、雨の日に出征して行った兄を気遣う弟の心境の重さが伝わってくる。なお、「今日の雨」は六月二十三日・金(第八五七号)に再掲載された。

日曜日以外の平日掲載作品について検討する。

第二四半期、四月一日・土(第七八六号)から六月三十日・金(第八六三三号)までの日曜日掲載分を除いた、平日の掲載数は八二作品。前述したように、この期間の発行数は、七七号。平日の八二作品と日曜掲載一二作品で合計九四作品(再掲載一作品を含む)となり、計算上は一号あたり約一・二二句となる。

平日掲載の八二作品のうち、「戦時下」が作品の背景となっていると考えられる「俳句」は、次の五作品。

大陸で二度目の春と軍事便

(埼玉県松上第一校五年男子、五月十二日・金、第八二二号)

只今と勇んで帰る帰還兵

(茨城県津澄校高二男子、五月十八日・木、第八二六号)

西住は戦車の中で靖国へ

(北海道黒松内校高二男子、五月十九日・金、第八二七号)

朧夜や探照燈の十文字

(東京市中延校六年女子、五月二十五日・木、第八三三号)

青空へ軍歌もひげ唱歌室

(秋田県上檜木内校高二男子、六月九日・金、第八四五号)

第一句「大陸で」は「二度目の春」を迎えたのは、父か兄か。何れにしても、身近な肉親であろう。日中戦争の発端となった盧溝橋事件の勃発が昭和十二年(一九三七)七月七日であり、一度目の春は昭和十三年の春、二度目は十四年の春ということになる。昭和十三年二月二十五日、兵役法が改正公布され、歩兵の二年在営制が復活された。

一九三六年(昭和十一)二月の入営兵は、一年半の在営満期直前の三八年春に二年在営への改正が適用され、二年在営満期を目前にした秋に在営期間の無期限延長が適用された。

(大江志乃夫『徴兵制』岩波新書、一九八一・二)

「二度目の春」も、こうした兵役法改正の渦中に置かれてしまったということなのであろうか。

第二句「只今と」の「帰還兵」は、大陸からであろうか。兵役法が改正されていることから「満期除隊」ということではなからう。一時的な帰還兵といったところか。

第三句「西住は戦車の中で靖国へ」の「西住」は、「昭和の軍神」西住小次郎大尉のこと。前稿において、昭和十四年の第一四半期、「東日小学生新聞」では、一種の昭和の軍神キャンペーンとでもいえる紙面構成が見られることを確認したが、この第二句の背景には、「東日小学生新聞」に連載された「少年物語 西住戦車長」(三月八日～四月十一日、全三〇回)の存在が推測できようか。

ところで、「軍神西住戦車展」は、前稿で述べたように、第一四半期、十四年一月七日の靖国神社から始まり、三月には上野松坂屋で開催され

ていた。第二四半期では、四月には九日から二十日まで谷津遊園地で開かれた。一方、「西住戦車長童話会」は、群馬県桐生市(二月二十六、七日)、東京日暮里第四校(二月十日)、新潟市(二月十六日～二十日)での開催案内や開催記事が「東日小学生新聞」に掲載された。この「童話会」は、北海道でも六月一日の札幌市内の小学校を皮切りに、五日小樽市のほか、十二日～十六日、二十一日～二十七日にかけて、北海道各地の小学校で開かれた。主催は東日小学生新聞、講師は、何れも「東日小学生記者 渡邊善房先生」。「東日小学生新聞」の「昭和の軍神」キャンペーンの一環であったと考えられよう。

第四句「朧夜や探照燈の十文字」の「探照燈」は、防空訓練であろう。この年三月内務省は「国民防空読本」を編纂、同月十九日には、上野松坂屋で「東京防空展覧会」が始まり、屋上には防空壕の実物も陳列されたという(「昭和5」前出)。何れも防空思想普及のためであった。

第五句「青空へ」は、「軍歌」が小学校の音楽「唱歌」の時間に取り上げられたということであろう。昭和十四年に発売された軍歌は、「大陸行進曲」(一月)、「父よあなたは強かつた」(二月)、「愛馬進軍歌」(三月)、「太平洋行進曲」(五月)など。また主な軍歌では、十三年には、「愛国行進曲」(二月)、「麦と兵隊」(十二月)が発売されていた。なお、発売期日の関係から、第五句の「唱歌室」では歌われなかったが、十四年十一月には「出征兵士を送る歌」、十五年五月には「暁に祈る」などが発表されることになる。

四 昭和十四年第二四半期における「書方」「図画」とこの期の概括

日曜日に掲載された「書方」は、三七作品(作品は、いうまでもなく旧字体であるが、便宣上、以下では新字体に改めた)。

字句において、時局的なものは、第一四半期には「満洲帝国万歳」の一作品があったが、第二四半期では、強いて挙げれば「天皇旗最敬礼」

の一作品のみ。

同じ字句での作品は、六年生の「法隆寺五重塔」と高等科一年の「朝踏落花暮随飛鳥」がそれぞれ三作品ずつ。二作品ずつ掲載されたのは、二年生の「タテヨコ」、四年生の「五月晴金魚売」、六年生の「野菜壘茶摘女」。

平日に掲載された作品は、一八五作品。

平日に掲載された作品で時局を反映したと思われる字句は、「銃後国民協力一致」と「戦争軍旗大砲」がそれぞれ二作品、「天皇旗最敬礼」が三作品（日曜掲載と合せると四作品）が掲載されたにすぎない。

字句は八六種にわたる。二二三作品中、多く見られる字句は、一部省略を含むものも同じ字句と数えらると、最も多いのは六年生の「法隆寺五重塔」の一六作品。次いで、八作品が、五年生の「苗代田蛙鳴く」、六年生の「吉野山千本桜」と高等科二年生の「澄神静慮具在筆端」。七作品が、五年生の「八幡太郎義家」と高等科一年生の「仰観山俯聴泉」。六作品が、高等科一年生の「史籍歌集医書」と同二年生の「野煙春光山霞晚色」。五作品に、二年生の「タテヨコ」と「山ザクラ」、高等科二年生の「顕微鏡細菌繁殖腐敗物」がある。

この第二四半期における「書方」の字句には、第一四半期同様「戦時下」故の傾向は顕著ではなかったといえよう。

日曜日に掲載された「図画」は、合計二三作品中、第一四半期と同数。

日曜日毎の「図画」作品の掲載が、前年の昭和十三年では第一四半期から第四四半期に経過するにつれて減少して行き、減少傾向は昭和十四年の第一四半期でも同様であり、掲載作品数のみならず、掲載機会も月一回ずつの合計三回にすぎなかったことを前稿において指摘しておいたが、第二四半期における一三作品が掲載されたのは、この期間僅か二回設定された「紙上作品展覧会」の紙面だけであった。

一三作品のうち図柄に時局を思わせるものは、「戦車」を描いた三年生の一作品のみ。ほかの絵柄は、風景画やバナナ、瓶、数椀のスケッチ

や鯉鱈が揚つている風景、人形を描いた作品などがある。

平日に掲載された「図画」は、五七作品。このうち、時局柄と推察される図柄には、傷病兵を描いた二年生の作品、同じく二年生の出征の壮行会風景を描いた作品、戦艦と旭日旗と水兵を描いた五年生の作品、高等科二年生の飛行兵を描いた作品の、合計四作品にすぎない。

平日掲載の「図画」の絵柄は、スケッチ風に家を描いた作品や山と家のある風景画が一六作品と最も多い。また、第二四半期という季節によるものであるが、「雛飾り」も一作品ある。静物画も多く、花瓶を描いたものが三作品のほか、カブ、瓶と皿、茶筒や急須湯飲みなどのお茶道具等々、様々が描かれた。平日掲載の作品についても、第一四半期同様、多くは児童の生活風景にある図柄であり、「戦時下」故の作品は多くはなかったといえよう。

以上、昭和十四年（一九三九）第二四半期の、四、五、六月の「児童文化」について、その位相と展開について検討してきた。

第二四半期の展開を概括すれば、検討対象である日曜日は第一四半期同様、十三回であるが、作品掲載のない日曜日が四回あり、九回が検討の対象となった。

この九回の日曜号のうち、「欄」の設定されたのは、五月十四日（第八三三号）と六月十一日（第八四七号）の二回のみであり、これも第一四半期と同様であった。

さて、検討に際しては、これら二回の「欄」だけでは作品数が余りにも少ないので、この第二四半期においても、「紙上作品展覧会」の見出しのない日曜日の作品も検討対象とし、各ジャンル共、日曜以外に掲載された作品も検討した。

作品のジャンル別に概括しておく。

「綴方」の日曜日掲載作品は、合計八作品。作品題名には「戦時下」を思わせるものはなかった。内容的にも「戦時下」故の作品はこれらの中には見当たらなかったが、「越道に行つた事」という作品の背景に

「兎報国」の時局柄を推定してみた。

平日掲載の「綴方」は、五五作品。このうち、「戦時下」を内容とすると考えられるものは一四作品。約四作品に一本の割合であり、決して少なくないといえよう。

「詩」の日曜掲載作品は、一六篇。一六作品のうち、時局柄を反映したものは、「るこつむかへ」一作品のみであり、それ以外は児童の日常的な身辺風景が作品内容となっていた。第一四半期での掲載数一七作品にも「戦時下」色の濃い作品は一作品であり、この第二四半期での「詩」作品の日曜掲載作品は同様の展開を見せたといえよう。

「詩」の日曜日以外の掲載作品は、七四作品。このうち、「戦時下」が作品の背景となつていてと考えられるのは、三作品だが、何れも深刻な内容ではなかった。

「短歌」の日曜日掲載作品は、第一四半期には十一首であったが、この第二四半期は僅かに七首。しかし、僅か七首のうち、「戦時下」を内容とする作品は四首であり、掲載数の半ばを超えていることになる。平日掲載作品数は三三作品。このうち、「戦時下」が作品の背景となつていてと考えられるのは、八作品。出征——戦場——帰還（遺骨或は傷兵）という兵士にとつて一連のステージが現われていた。

日曜・平日の合計がほぼ同数の掲載であった昭和十四年第一四半期には「出征」風景は見られたが、遺骨迎えはなく、この第二四半期には兄の遺骨での「凱旋」が詠まれるところとなった。また第二四半期の日曜・平日を合わせた掲載数四〇のうち「戦時下」を内容とするものは一一作品。掲載数からはかなりの比率であった。

「俳句」の日曜日掲載作品は一二句。この内、「戦時下」を内容とするのは、二句のみで、他は児童の身辺詠とでもいふべき作品。「俳句」の平日掲載作品は、八二句。この内、「戦時下」が作品の背景となつていてと考えられるのは、五作品。日曜掲載作品同様に、「遺骨迎え」などのような深刻な作品は見られなかった。また、日曜・平日を合わせた掲載作品九四作品中、何等かの「戦時下」色がある作品は、七作品に留ま

つている。

「書方」で日曜に掲載された作品は、三七点。字句において、「戦時下」を思わせるものは、「天皇旗最敬礼」の一作品のみ。平日に掲載された作品は、一八五作品。

平日に掲載された作品で時局を反映したと思われる字句は、「銃後国民協力一致」と「戦争軍旗大砲」がそれぞれ一作品、「天皇旗最敬礼」が三作品（日曜掲載と合すると四作品）が掲載されたにすぎない。第二四半期、日曜と平日掲載作品の合計は二二二作品に上り、第一四半期での掲載数（二七八作品）を大幅に超えたが、時局柄の字句を作品とした割合は多くはなく、第一四半期同様「戦時下」故の傾向は顕著ではなかったといえよう。

日曜日に掲載された「図画」は、合計一三作品。この内、絵柄に時局を思わせるものは、「戦車」を描いた三年生の一作品のみ。平日に掲載された「図画」は、五七作品。この内、時局柄と推察される絵柄には、傷病兵を描いた作品、出征の壮行会風景を描いた作品、戦艦と旭日旗と水兵を描いた作品、飛行兵を描いた作品の、合計四作品にすぎない。平日掲載の作品についても、第一四半期同様、多くは児童の生活風景にある絵柄であり、「戦時下」故の作品は多くはなかった。

このように、昭和十四年第二四半期、日曜と平日を合わせた作品の総体では、「詩」「俳句」「書方」「図画」の作品には比較的「戦時下」色は薄かったといえるが、「綴方」と「短歌」においては、「戦時下」色はつきりとしていたといえよう。

昭和十四年第二四半期における戦況は、第一四半期同様、前年十月二十七日の武漢三鎮占領後の比較的落ち着いた状況にあった。十三年十二月六日、陸軍省と参謀本部は「漢口広東攻略ヲ以テ武力行使ニ一期ヲ画シ爾後自主的ニ新支那ノ建設ヲ指導シ殊ニ躁急ヲ戒ム 之カ為当分ノ内其基礎作業タル治安ノ恢復ヲ第一義」（『戦史叢書』8）とする「昭和十三年秋以降対支処理方策」を決定し、戦略的な大作戦は終り、占領地の確保に移るとした（『昭和5』前出）。

一方、国内では、十四年年明け早々の一月四日、第一次近衛内閣は総辞職。五日、平沼騏一郎内閣となり、この平沼内閣は二月九日「国民精神総動員強化方策」を臨時閣議で決定し、総動員体制の強化に乗りだした。第一四半期同様、第二四半期にあっても「銃後」における「戦時下」は「戦時」色が一段と濃くなっていった。

大陸では「漢口広東攻略ヲ以テ武力行使ニ二期ヲ画シ」たとしても、「銃後」の兒童の身边における「戦時下」が「一期ヲ画」されたわけでは、勿論ない。「英霊」や「兄さんの出征」はこうした事情を見せてくれよう。

(1000・11・30)